

文芸

俳句

楽譜から雫れて踊る蛸蚪のむれ

池田 逸子

春耕やひねもす鳥の声の中

伊藤 敬子

老二人黄金週間恙無し

今関満喜子

芹摘みや香りが先に料理する

魚地 照子

思ひ出の押し寄せて来る花の闇

江森 悦子

平成の今早乙女は死語となり

川島 道則

公園の桜蕊降る昼餉かな

向後 寛

幼孫春の野の花佛壇へ

越川せつ子

菟菟の貧乏播すり春の雷

小松 藤男

8%の値上げに急ぐ春日傘

佐瀬 輝夫

土塊の小ささも解し茄子植うる

椎名万里子

静けさや途切れし話目借時

鈴木とし子

影も又足ひきずりし青田風

鈴木 利子

店の名を卯浪と名づけ安房を恋ふ

玉虫 栗扇

胡瓜苗支柱ほしいや風の舞ふ

土屋美枝子

山深き大多喜の城わらび餅

土屋 義昭

二時起きも我慢我慢の茶作りや

戸村 静華

雨受けていつそう重き八重桜

早川 勇

急変の雨花人に花にかな

藤田 雅夫

短歌

葉桜に残りし花の花びらも

透して春の光降りくる

西山満里子

春の陽を笑顔であびて歩きゆく

加瀬 弘子

梅の花散り敷く一日夫に従き

御墓に香華手向けんと来ぬ

浅野 榮子

マレーシアへ発ちて行く息の飛行機が

定刻通り頭上飛びゆく

芹川 初子

保育器に入るやもしれずと生れくれし

男孫が今日は入学式なり

田崎 尚美

総の丘おひるなる雑木木も

五月若葉の眩しかりけり

斉藤つね子

柿若葉陽光醸す黄の色に

あたり明るく一日暮れゆく

秒針を止めたきほどの寝れぬ夜

無心になりて寝返りを打つ

西窓を真赤に染めて雲の間に

日が隠れゆく心癒して

焼き印ある名店の玉子焼

金塊のごと持ち帰り来ぬ

越川 義則

焼き印ある名店の玉子焼

金塊のごと持ち帰り来ぬ

越川 義則

焼き印ある名店の玉子焼

越川 義則

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

6月 写友会

7月 カトリア会

◎文化会館ロビー

6月 短歌会

7月 絵手紙ひかりの詩

◎サビア横芝店

6月 俳句会

7月 水墨画クラブ

◎銚子商工信用組合

6月 横芝写真クラブ

7月 アート押し花クラブ



平安時代のお金

日本で初めてお金が出現するのは弥生時代で、中国から渡ってきたものである。その後、国内で独自に造り出したお金が「富本銭」で、その次に造られた「和同開寶」は有名である。その後日本は、奈良から平安の律令時代に作られた「皇朝十二銭」により、中国にならって貨幣経済を發展させようとした。

しかし、まだ物々交換経済が主であったため、貨幣はあまり必要とされなかった。ここに紹介する写真は、「富壽神寶」と呼ばれる皇朝十二銭のうちの五番目で、弘仁九年（八一八年）に造られたお金で、篠本神山谷遺跡から出土した。



▲篠本神山谷遺跡の富壽神寶

（社会文化課 道澤 明）